

自記年譜

小堀桂一郎

〔幼少期〕

昭和八年九月、東京市本郷區（當時）に生る。父は洋畫家にして常に終日家居、アトリエに籠り居る型の人なり。昭和十五年四月、福山藩々校誠之館の後身とせらるる區立誠之小學校に入學、第四學年修了まで在籍す。昭和十九年四月、強制疎開のため家を取毀され、静岡市郊外に移住す。流離の悲哀はあれども田園生活の悦樂を知りて喜びも深し。昭和二十年四月、沼津市に移住、その年小學校六年生にして敗戦と占領開始に伴ふ時相の變轉と人心の頼み難きを経験す。昭和二十一年四月、沼津中學校（舊制）に入學、學制改革のためそのまま新制沼津東高等學校の生徒となり、卒業前病氣休學のことありしたため都合七年間同校に在學し、昭和二十八年三月漸く卒業す。幸ひにして保守的堅實の校風なりしたため、國語・漢文の師（複數）に愛され、歴史的假名遣使用への固執につき注意を受けたる記憶なし。

〔學歴〕

昭和二十九年。四月、東京大學教養學部に入學。標準より二年遅れの進學なれども健康十分に恢復しをり、學寮生活を大いに楽しむ。學部・専攻を異にする友人を多く得たることを生涯の寶とす。

昭和三十三年。三月、東京大學文學部獨逸文學科を卒業す。但し在學中

熱心に聴講したるは吉川逸治教授の「西洋美術史・文藝復興期」、原佑教授の「ハイデッガー研究（『存在と時間』論）」、平井正穂教授の「イギリス浪漫主義の諸問題」等なり。同年四月就職準備のため、教養學部教養學科に學士入學す。非常勤講師として出講されるたる竹山道雄氏の講義・演習を受講し深き感化を受く。又島田謹二教授、菊池榮一教授の聲咳に接し研學の志を新たにす。

昭和三十四年。四月、大學院比較文學比較文化専門課程に入學。五月、日本ゲーテ協會の募集したるゲーテ研究懸賞論文に「ファウスト研究」を以て應募し、十一月、第一回日本ゲーテ賞授賞と通知せらる。

教室にては富士川英郎教授のリルケ、ホーフマンスタールの講義を熱心に聴講、又島田謹二教授の私設助手として師の『ロシアにおける廣瀬武夫』研究の資料探索に協力、却りて多大の御示教を受く。

昭和三十六年。三月、大學院比較文學比較文化専門課程修士課程を修了。

四月、ドイツ連邦共和國フランクフルト・アム・マイン市のJ・W・ゲーテ大學に留學す。此は右に記したる日本ゲーテ賞の副賞として、ゲーテ大學より獎學金を支給せられし故なり。留學といふも特別の義務なく、むしろ交友と遊樂に専念す。八月、ベルリン市に於ける「恥辱の壁」構築事件に遭遇し、社會主義體制の實體を知る機縁となる。

同月シュタルンベルク湖地方に旅し、森鷗外のドイツ留學を研究課題とするの着想を得る。『うたかたの記』の點景をなす國王溺死事件の史實につき資料を集む。

昭和三十七年。八月、二週間餘バイロイトに滞在し音樂祭の全演目（ヴァーグナーの歌劇・樂劇計八曲）を觀劇する機會を得、心裡に深き記憶を刻む。

昭和三十八年。一月、南佛を旅し、P・ヴァレリーの故郷セトに「海邊

の墓地」を訪ひて印象深し。三月、歸國復學す。

〔職歴・事歴・一〕（明星大學着任前）

昭和三十八年。四月、日本ゲート協會々長・慶應義塾大學教授相良守峯博士の配慮により同大學經濟學部研究助手に就任。以後五年間専ら研究に従事することを得て學位論文の制作に専念。授業負擔は至つて輕微なれども小人数演習等を通じ、學生との關係甚だ良好にして終生の交友を結ぶ間柄となりたるもありたり。この頃歌誌「童牛」に加入、同人となる。又この年、西尾幹二、松本道介、故柏原兵三等の結成したる「しんせい會」に加入、同人誌 *Neue Stimme* に、その第十二號を以ての休刊（昭和四十五年七月）まで熱心に寄稿す。

昭和四十三年三月。學位論文『若き日の森鷗外』を東京大學富士川英郎教授を主査とする審査委員會に提出。同時に東京大學教養學部助教授に就任の勧めあり、慶應義塾への恩誼斷ち難き思ひあれども相良博士の諒解を得て東京大學に移籍す。

昭和四十四年。三月、前記論文により文學博士の學位を受く。十月、同書は東京大學出版會より刊行され、翌四十五年一月、第十九回讀賣文學賞（研究部門）を贈らる。

昭和四十六年。十一月、岩波書店より第三次『鷗外全集』の刊行企畫せられ、その編集過程にて翻譯原本及び醫學關係の資料調査を擔當することとなり、この面での自身の研究も進展す。

昭和四十八年。日本文化會議に加入す。田中美知太郎、福田恆存、會田雄次等諸氏の値遇を得しを喜ぶ。

昭和五十一年。九月、東大比較文學會機關誌「比較文學研究」に「エヴリマン說話」の研究を發表したるを機會に、東西兩洋の說話文學の交流史研究に深入りし始む。

昭和五十二年。八月、富士川英郎師と斑鳩、飛鳥、奈良、備後神邊に遊ぶ。

昭和五十三年。十一月、岩波書店より『鷗外選集』全二十一卷の刊行開始に當り、その全卷の作品解説と資料問題を單獨擔當す。

昭和五十七年。二月、宇都宮市栃木縣立美術館にて祖父歴史畫家小堀鞏音の歿後五十年記念展開催に當り、祖父の傳記を草して同美術館の圖録に掲載す。七月、第一次教科書事件（檢定結果虛報事件）起り、オピニオン誌紙上で内閣官房及び文部省と左翼ジャーナリズムを嚴しく批判す。八月、前年「諸君！」に連載したる『宰相鈴木貫太郎』を文藝春秋より刊行す。九月、竹山道雄氏に隨伴して記録映畫『東京裁判』の試寫會にゆく。竹山氏より東京裁判の「再檢證」の必須なることを示唆さる。十月、「正論」に論文「東京裁判史觀を脱却せよ」を執筆し、以後多年に亙る東京裁判批判を開始す。

昭和五十八年。三月、「竹山道雄著作集」全八卷の刊行始まる。編纂と一部（第六卷）の解説を擔當す。四月、前年刊行の『宰相鈴木貫太郎』に對し第十四回大宅壯一ノンフィクション賞を贈らる。八月、國民文化研究會主催の學生青年合宿教室（於雲仙）に初めて出講し、以後度々に及ぶ。

昭和五十九年。三月、「教科書正常化國民會議」に参加し、偏向教科書の是正運動に取組むこととなる。六月、竹山道雄氏の逝去に遭ふ。九月、前年より編纂刊行に従事し居たる『菊池榮一著作集』全四卷完成す。解題と「年譜」作成を擔當す。

昭和六十年。九月、同人誌「童牛」廢刊となり、歸屬を失ふ。二年後誘ひを受け「窓日」に加入す。

昭和六十一年。五月、監修を擔當しゐたりし高校用國史教科書『新編日

本史』の検定結果をめぐり編集委員會と文部省・朝日新聞との間に軋轢發生し、七月、第二次教科書事件所謂「外壓検定事件」に發展す。編者代表として編集主幹朝比奈正幸氏と共に度々の對文部省交渉に當り、激論徹夜に及びしことあり。八月、菊池榮一教授の逝去に遭ふ。同月航空自衛隊第六航空團（小松基地）の教育講話に出講、以後三澤入間、築城等の空自基地に出講すること度々に及ぶ。

昭和六十二年。三月、東京大學教養學部研究紀要「比較文化研究」（第25號）に『天道攷』を發表、此を機に以後日本精神史の研究に主力を注ぐこととなる。右の研究は同紀要第33號（平成六年三月）所載の第五回を以て中斷状態に入る。八月、十五日の第一回戦歿者追悼中央國民集會に参加、以後連年この日の靖國神社參拜と集會出席を缺かしたることなし。十月、歌誌「窓日」同人となる。

昭和六十三年。聖上の御不例に鑒み、畏れながらも皇位繼承儀禮（就中大嘗祭）の研究に、同憂の士と共に盡瘁す。

平成元年。諒闇中ながら皇位繼承儀禮と皇室の諸問題につき心ならずも嚴厲なる意見を公表すること頻々たり。

平成二年。前年に引續き、御大典の無事の舉行をめぐりて言論・文筆活動に精勵す。十二月、東京裁判に關する重要な未公開資料のある事を知る。

平成三年。四月、同志七人と諮り「東京裁判却下未提出辯護側資料編纂刊行會」を結成し、その代表として未公開資料の編纂に從事することとなる。十一月、海上自衛隊佐世保地方總監部及び第22航空群大村基地に赴き、教育講話に奉仕す。此を端緒とし、以後連年國內十六の地方總監部・術科學校・幹部學校・教育隊・基地幹部會等の教育訓練に出講す。

平成四年。一月、今上天皇の御訪中問題起り、以後主として産經新聞

「正論」欄を舞臺に強硬なる御訪中反對の論陣を張る。二月、東京裁判未公開資料編纂事業の最有力の盟友たりし星運吉辯護士の急逝に遭ひ、衝撃強し。四月、初めて明星大學日本文化學部に非常勤講師として出講す。これより前、兒玉三夫氏、井上英明氏の知遇に感ずる所あり、退官後本學に専任教授として赴任することを約す。十月、恆例の海上自衛隊觀艦式招待に初めて妻子を帶同す。乗艦は「うみぎり」。

十二月、昭和六十三年八月の潜水艦「なだしお」と遊漁船富士丸との衝突事件に係る裁判の開始に當り、「なだしお」辯護の論陣を張るべく資料の蒐集に努む。海上幕僚監部及び當事者の協力を請ふ。

平成五年。四月、島田謹二教授の逝去に遭ふ。五月、六月、七月、「正論」誌上に「なだしお」有罪の判決を厳しく批判す。九月、大學院比較文學比較文化専門課程の學生一統（約三十名）を引率して御盛儀を控へたる伊勢皇大神宮に正式參拜す。次いで宿願の大和三輪山の御登拜を果し、山の邊の路を歩く。十月、伊勢神宮式年遷宮の重儀に際し、臨時出仕として内宮垣内の庭燎番を務む。以後神宮崇敬會との縁故深くなる。

平成六年。三月、東京大學を定年退官す。

〔職歴・事歴・二〕（明星大學着任以降）

平成六年。四月、明星大學日本文化學部に専任教授として着任す。八月、村尾次郎博士の慫慂により日華交流教育會々長の任を引受く。十二月、前記會長として臺灣に赴き交流教育會研究會にて講演す。古田島洋介氏通譯を務む。臺灣に舊友少からず、舊交を暖むる機會となる。以後隔年にこの學會のため渡臺す。古田島氏常に名通譯たり。

平成七年。二月、『東京裁判却下未提出辯護側資料』全八巻の前半部刊

行成る。三月、同上後半部刊行成り、出版事業完成す。四月、かねてより懸案の日米戦争休戦五十周年記念なる硫黄島戦歿者鎮魂土俵入催行の議熟し、「いおう會」代表として日本相撲協會出羽の海理事長と提携し、防衛廳に協力要請の折衝を始む。空自・海自の制服組幹部に辱知の現役多く、極めて順調に進展す。實地検分のため硫黄島に渡る。六月、硫黄島にて兩横綱による日米兩國戦歿者鎮魂の土俵入を無事舉行す。當時横綱は曙關と貴ノ花關なり。七月、島田謹二教授の藏書を青梅校舎圖書館に受贈すべく手續を取る。九月、京都府の民間鷗外研究家伊達一男氏の遺品藏書を青梅校舎圖書館に收納するため、井上英明氏と共に丹後峰山の伊達家に赴く。十二月、『東京裁判却下未提出辯護側資料』全八巻の出版に對し第四十三回菊池寛賞を贈らるることとなり、刊行會代表として授賞式に出席す。

平成八年。六月、井上英明氏日本文化学部共同研究の計畫を發案せしにより、共に構想を練り、實現に盡力す。十月、祖父小堀鞆音の郷里栃木縣佐野市にて生家跡に地元有志による畫業顯彰碑建立の事あり、除幕式に出席す。

平成九年。三月、『新編日本史』編纂委員會の母體たりし「日本を守る國民會議」を改組し、「日本會議」と名稱を改め、黨敏郎氏を會長として新發足の議決る。副會長を委嘱さる。四月、黨敏郎氏急逝す。同月、最高裁に於ける「愛媛玉串料訴訟」の違憲判決並に判決の事前漏洩事件に際會し、同志と共に批判運動を展開す。三好達最高裁長官の「少數意見」にわづかに救はれたる思ひを懷く。同月二十八日、入江隆則、井尻千男兩氏と企畫したる「主權回復記念國民集會」の初回を九段會館に催す。以後連年この日に開催し現在に至る。五月、臺北に於ける日臺關係シンポジウムに出席、多くの舊友に再會し、又李登輝

總統を訪問、懇談す。六月、韓國ソウル市にてのアジア國際比較文學會に出席し、此地にても多くの知友と舊交を暖む。

平成十年。三月、日本文化学部共同研究論集第一輯『普遍文明と民族文化』を刊行す。十月、靖國神社崇敬奉讃會設立總會あり、常務理事を委嘱さる。

平成十一年。三月、學部共同研究論集第二輯『表現——目的と手段』を刊行す。四月、日江井榮二郎氏の慫慂により圖書館長の職を引受く。本學にては一切の役職を免ぜらるべきこと着任時の條件としておきたりしが、日江井氏の懇望により當方より約を枉げたるなり。七月、靖國神社遊就館展示構成檢討委員を委嘱せられ、諾す。十二月、圖書館間連絡會議を定例に開く事とし、業務整備に少しく改善を試む。

平成十二年。二月、右の方針に基き、いわき明星大學圖書館を訪ひ、相互に現状を把握し置かんことを諮る。三月、學部共同研究論集第三輯『想像力と現實描寫』を刊行す。四月、昭和五十八年の合宿教室以來關係親密なりし國民文化研究會に顧問たることを諾す。同月、伊勢神宮崇敬會理事就任を諾す。以後伊勢に赴く事頻繁となる。六月、靖國神社遊就館の増改築計畫に伴ひ、設計檢討委員となり、度々會合して討議を盡す。七月、東京大學に教官の停年延長問題生じ、意見を同じくする退官教授諸氏と會同して反對運動を起すも功を奏せず。十月、恆例の海上自衛隊觀艦式に際し「しらね」艦上に三好達前最高裁判所長官の面識を得、空席を續けるたる日本會議會長人事につき私に展望を開く。十二月、防衛廳の市谷臺一號館保存問題につき同憂の人々と會合を開く。

平成十三年。二月、フジサンケイグループより第十六回正論大賞を贈られ、記念祝宴に學部同僚多くの出席を得る。受賞により三月大阪、四

月東京、六月兵庫での記念講演その他の催し多く、疲勞す。三月、學部共同研究論集第四輯『傳統と前衛』を刊行す。四月、島田謹二氏御遺族より「島田謹二學藝奨勵賞」設立の相談を受け、構想を練る。同月、かねて乃木神社崇敬會「中央乃木會」會長たらんことを請はれるたりし所、御祭神と祖父との因縁を顧みて應諾、春秋の例大祭に祭文を草し、奏上する慣ひとなる。五月、明星大學兒玉記念圖書館開館二十五周年記念事業として、所藏貴重圖書圖錄を編纂刊行せんことを發案し、日江井氏の賛同を得。六月、同上企畫遂行のため精興社との協議に入る。十一月、シェイクスピアホールにて兒玉記念圖書館二十五周年の記念式典を舉行、渡部昇一氏を記念講演の講師に招く。十二月、記念出版の貴重書圖錄完成す。同月、三好達氏を日本會議會長に推戴の案件成就す。

平成十四年。二月、同憂諸家の協力を得て『ゆとり教育が國を滅す』を編纂、小學館より刊行す。幸ひにして廣く反響と支持を得。三月、學部共同研究論集第五輯『古典と先達』を刊行す。五月、國語問題協議會理事として編纂に参加したる『平成新選百人一首』刊行成る。八月、明治天皇御生誕百五十年記念に明治神宮の募集したる懸賞應募論文の審査に従事す。十月、海上自衛隊創設以來初めての國際觀艦式に招かる。乗艦は「しまかぜ」。

平成十五年。二月、富士川英郎老師の逝去に遭ふ。三月、學部共同研究論集第六輯『表現(Ⅱ)——言葉と形象』を刊行す。七月、國語問題協議會より執筆を委嘱されたる『平成新選百人一首』の姉妹篇『和歌に見る日本の心』思ひがけぬ大冊(五八〇頁)となりて刊行さる。佐久間美智子氏による裝釘意匠並に古風大和繪を用ゐし口繪六葉好評を博す。同月、舊著『東京裁判 日本の辯明』の英語版完成し送本し來

る。十月、海上自衛隊觀艦式にて初めてイージス艦「きりしま」に搭乘し、その性能につき詳細の説明を聴く。十一月、自衛隊記念日に海上幕僚長古庄幸一海將より、過去十二年間の幹部教育への貢獻につき感謝狀と記念盾を贈らる。

平成十六年。一月、終講に際し、自主ゼミナールを企畫し實行したる三人の學生(二年生)に對し自著を贈りてその勞を搞ひ、且つ好學の志を賞す。三月、學部共同研究論集第七輯『時間と空間』を刊行す。同月、明星大學日本文化學部を退職。